

[資料解題]

学生による授業評価の試み (I)
——「心理学」の場合——

益 田 良 子

- <目 次> 1 はじめに
2 授業の概要
3 評価方法
4 評価の結果
5 考 察

1 はじめに

大学設置基準の大綱化が行われ、各大学独自の教育とそれにともなう自己評価の重要性が強調されるようになった。ところで、この大綱化における自己評価の対象は、授業、選抜と入学などを含む大学における教育活動の全領域、研究活動、学生指導、施設・設備を含む教育環境条件、経費と運営などの管理運営面、教育の国際化、就職、地域社会への貢献など多岐に及ぶことは言うまでもない^{(1) (2)}。したがって、大部分の問題は、大学が全体として取り組むべき問題であり、私立大学では、設立の母体である学校法人が取り組むべき問題も少なくはない。

しかし、大学における教育は、現実には個々の教員の授業を通じて行われており、授業そのものの評価なしには、大学の自己評価は始まらないのではないかと考えられる。とくに、私学として、かかげられた建学の精神と教育目標を達成するためには、試験などの評価手段によって、学生の授業の内容の理解度を知り、フィードバックを行うだけでは、不十分であり、学生によって、教授者の評価を行うことによって、質的な向上をはかることができると考えられる。このような観点から、すでに、アメリカにおいては、学生による授業評価が広く行われていることが知られている⁽³⁾。わが国でも、国際キリスト教大学(ICU)⁽¹⁾、東海大学⁽⁴⁾などで、すでにこのような形での授業評価が行われているが、実施している大学は、いまだ少数であり、その方法についても、暗中模索をしているのが現状であろう。

本学においては、学生による授業評価を行うことが学部によっては奨励されているが、今のところ、必ずしも、組織的に行われてはいない。しかしながら、大教室における授業では直接個々の学生の反応はつかみにくく、より質の高い授業を行うためには、授業の目標に対する到達度を筆記試験を行って確かめるだけでなく、学生による評価によって学生のニーズをつかみ、授業内容や方法を改善することも必要であると考えられる。このような評価については、第三者による審査委員会などによって画一的な評価基準をつくって評価することも

考えられるが、それ以前に、評価の項目、基準、評価方法について、基礎的資料を十分に得る必要がある。

そこで、平成3年度、筆者が担当した「心理学」の受講生に対して試験による評価を行うとともに学生による授業についての一連のアンケート調査を行った。

2 授業の概要

(1) 授業の構成

4月初めに履修届を出した受講生は火曜日3時限が349名、木曜日1時限が161名、計510名であり、商学部432名(1～4年)、法学部78名(2～4年)であった。法学部には1年生の受講生がいないのは、「心理学」が2年次以降の選択科目に指定されているためである。

(2) 授業の方法

教科書および副読本を指定し、授業の内容は、原則的には、教科書とほぼ同じことがらを扱ったが、必ずしも教科書とは同じ順序で講義を行うとは限らなかった。また、必要に応じて、教科書にない内容についても言及した。火曜日の授業も木曜日の授業もマイクを用いて講義を行った。授業の目的、要旨、聴覚的に提示されただけでは理解しにくいことがらは、随時板書した。また、教科書には含まれていない内容や、図や表が教科書以外に必要であると判断されたときには、プリントを配布した。1年間の授業回数は試験の日を含め30回であった。

(3) 授業の内容

講義要綱で予告した通り、人間の「こころ」についての理解を深めることを目的とし、人間の心理と動物の心理を対比して学習させるように努めた。具体的には、動因、性格、記憶、学習、知覚、言語、社会心理などの領域における

基礎的な知識を豊かにすることを意図した内容を扱った。しかし、単に、伝統的な内容を一般的な問題として提示するにとどめず、できるかぎり学生が興味を持ちそうなことがら、例えば、最近話題になっている拒食症と過食症の話であるとか、身近かな現象でありながら解決されていない、地平の月の過大視の問題などを話題にするように努めた。他方、学生の要望にはあったものの、犯罪者や異常な心理状況については、より専門的な科目で扱われるべきであると考へ、話題にはしなかった。なお、年間の具体的な講義予定はあらかじめ年度初めに配布し、多少のずれはあったが、ほぼその通り実施した。

3 評価方法

(1) 学生の学習状況についての教師による評価

①出席状況についての評価

規定によれば、単位取得のために評価を受けるためには、年間の授業の3分の2以上に出席することが必要であるとされている。しかしながら、この授業は受講生が多く、大教室における授業であるため、出席をとっても、どの程度、信頼性があるかは疑問である。このような状況では、厳密かつ正確に学生の出席状態を把握しようとするほど、出席をとること自体と、その後の整理に時間と労力を要する。また、年度はじめの調査における学生の出欠についての希望も考慮に入れることにし、出席は年間を通じて10回とった。そのうち6回はあらかじめ予告した日にとり、残り4回は予告しない日に不意にとった。

②授業内容の学習到達度についての評価

前期および後期の試験期間中に筆記試験を行なった。あらかじめ、試験の範囲および重要事項を告知した。試験に際しては教科書、ノートなどは一切持ち込み不可とした。

(2) 授業についての学生による評価

①事前調査

第1回目の授業に参加した学生に以下の質問に答えさせた。

- a. なぜこの授業をとったか。
- b. 何について学びたいか。
- c. 出席はとったほうがよいか、とらないほうがよいか。

これらの問に対する主な解答を列挙すると以下のとおりであった。

- a. 心理学を学びたかったから。
人文系の単位が欲しい。
昨年単位を落としたため。
この時間があいていたから。
友達と同じ授業に出たかった。
- b. 人間の心理について学びたい。
動物の心理について学びたい。
性格について学びたい。
宮崎のような異常な人の心理について学びたい。
- c. 出欠についてはとったほうが良いという学生と、とる必要はないという学生が同数おり、その他どちらでもよいと解答した者もあった。

②学年末のアンケート調査

年度はじめに行った調査や、年間の授業を通じて感じたことをもとにして、アンケートを作成し、学年末の試験のときに無記名で記入させた。試験以外のときに行うことが望ましかったが、最大多数の学生の解答を集めるために試験時に行った。配布した数は414、回収数は364、回収率87.9%であった。回収したうち、まったくアンケートに答えていないもの、学年、学部の記入がないものは除外し、358名のアンケートについて分析を行った。

学生に対する質問は、(A)最も興味を持ったテーマ、(B)授業内容、教材、指導

技術についての評価、(C)教室環境に対する評価、(D)出席状況についての自己評価、(E)授業を選択した動機、(F)受講していた座席の位置、(G)その他(自由記述)からなっていた。本稿では、心理学のどの分野に興味を持ったかを質問した。(A)の項目を省いた(B)から(G)の項目の調査結果について紹介する。

4 評価の結果

(1) 学生の学習状況についての評価

①出席状況について

出席をとることが予告された日(6回)の平均出席数は3.5(SD=1.94)、予告しなかった日(4回)の平均は2.0(SD=1.39)、合計出席回数(10回)の平均は5.5(SD=3.02)であった。

②試験による評価

4月当初、受講の申込を行った者は510名であったが、前期の試験の受験者数は393名であった。試験問題は、あらかじめ予告されており、組み合わせ法による客観テストと図表を参考にしての記述問題からなっていた。この前期試験における得点の平均点は49.0(SD=13.91、範囲0~90)であった。採点后、試験の答案には評価点、注意事項などを記入し各自に返却した。また、このとき、前期の試験の評価点が良くなかったものを励ますため、この科目の最終的な評価は前期と後期の試験の平均点によると予告した。

1月に行われた後期試験の受験者数は414名であり、平均点は61.5(SD=19.80、範囲0~100)であった。前期および後期試験の得点の分布は図1の通りである。

前期と後期の試験の平均点を比較すると後期の方が得点の平均は高く、得点の分布からも後期の試験の方が成績が良いことがわかる。これは、学生が試験の予告問題を準備すれば得点が得られることを前期の試験で経験したこと、前期と後期の試験の平均を最終的な評価点にすると予告したため、前期の試験の

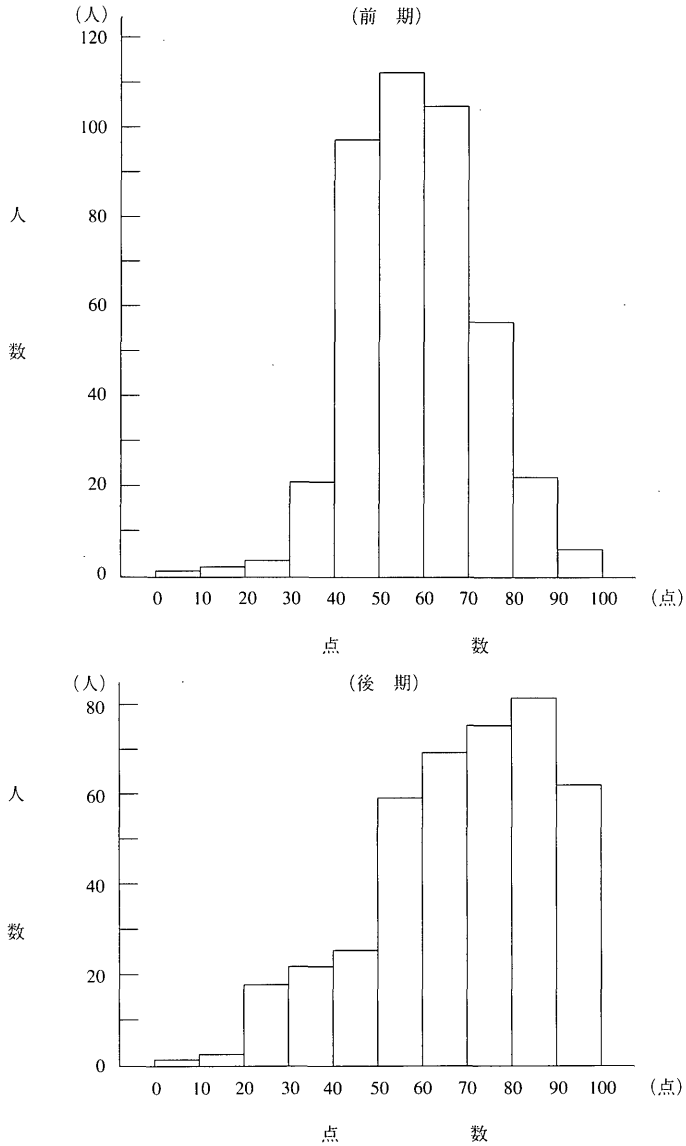


図1 試験による評価点結果

前期 (上段) および後期 (下段) の試験の評価点 (粗点) の分布を表したものである。

成績がかんばしくなかったものが努力したこと、課題の難易度をやや下げたことによると考えられる。

③出席回数と成績

一般に出席回数が多い学生は成績が良く、欠席がちな学生は成績が良くないと予想されるが、この点について確かめるため、出席回数と後期試験点数との間に相関があるかどうか調べてみたところ、有意な相関が認められた ($r = .3024$, $t = 6.4397$, $N = 414$, $P < .01$)。また、予告せずに不意にとった出席回数と後期の試験成績の間にも有意な相関が認められた ($r = .2135$, $t = 4.436$, $N = 414$, $P < .01$)。

(2) 学生による評価

①授業の評価

以下の12の項目について5段階の評価をすることを求めた(図2)。

B この授業を次の観点から5段階評価してください(たて線と横線の交点に○をつけてください)

	5	4	3	2	1	
(1)興味深い内容だった						興味のわかない内容だった
(2)期待していた内容だった						見当はずれの内容だった
(3)新しい知識が得られた						何ら新しい知識は得られなかった
(4)今後の人生に役に立つ						何の役にも立たないだろう
(5)今後の専門科目の勉学の基礎となる						専門科目の基礎にはならない
(6)ものの見方が変わった						ものの見方に変化はない
(7)内容は理解できた						まったく理解できなかった
(8)これからも心理学を学びたい						心理学の勉強はもうたくさんだ
(9)話題が豊富だった						話題が多すぎてまとまりがなかった
(10)黒板の字は大きく読みやすかった						小さくて読みにくかった
(11)話し方はゆっくりで、聞き取りやすい						早口で聞き取りにくい
(12)資料のプリントは理解しやすかった						プリントはさっぱり理解できなかった

図2 学生による授業評価に用いた項目

図3は12項目の5段階評価の平均をレーダチャートに表したものである。

解答結果によれば、大多数の学生は、内容は興味深く、新しい知識が得られ、

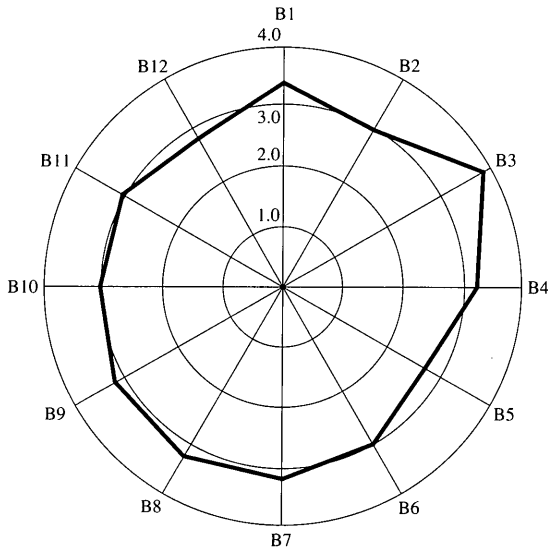


図3 学生による授業評価

学生による授業評価の結果をレーダー・チャートで表したものである。
 図中の B 1～B12は図2の(1)～(12)の項目に対応する。

理解もでき、話題も豊富であったとしており、これからも「心理学」を学びたいと答えている。他方、かなりの数の学生は今後の専門科目の勉学の基礎となるとは考えられず、資料として配布したプリントは、やや理解しにくかったようである。プリントは、前述のとおり、教科書レベルよりもやや高い内容のものであり、図表などを多く含んでおり、読みとることが比較的困難であったのだろう。

②教室環境について

教室環境についての評価項目は図4のとおりである。

5段階評価の結果をまとめたものが表1である。

8項目のうちほとんどの項目については、大多数の学生が普通であることを表す3にマークをつけているが、学生の人数については、多すぎると感じてい

C 教室環境などについて評価してください。

	5	4	3	2	1	
(1)マイクの音量は大きすぎた						音量が小さすぎた
(2)声(マイク)は明瞭であった						不明瞭であった
(3)教室が大きすぎた						小さすぎた
(4)授業を受ける学生の人数が多すぎ						少なすぎた
(5)教室の照明は明るすぎた						暗すぎた
(6)夏の教室の温度は高すぎた						低すぎた
(7)秋・春の教室の温度は高すぎた						低すぎた
(8)冬の教室の温度は高すぎた						低すぎた

図4 教室環境についての評価項目

表1 学生による教室環境についての5段階評価

項目	各段階をマークした人数(%)					総解答数
	5	4	3	2	1	
C 1	8(2.2)	26(7.3)	266(74.4)	46(12.8)	12(3.3)	358
C 2	4(1.1)	40(11.2)	197(55.0)	84(23.5)	33(9.2)	358
C 3	15(4.2)	34(9.6)	215(60.3)	53(14.9)	39(11.0)	356
C 4	72(20.3)	84(23.7)	180(50.9)	14(4.0)	4(1.1)	354
C 5	7(2.0)	20(5.6)	295(82.3)	25(7.0)	11(3.1)	358
C 6	120(33.5)	78(21.8)	145(40.5)	11(3.1)	4(1.1)	358
C 7	5(1.4)	34(9.6)	293(82.5)	16(4.5)	7(2.0)	355
C 8	5(1.4)	38(10.6)	223(62.5)	52(14.6)	39(10.9)	357

項目C 1～C 8は図4の(1)～(8)に対応

る学生が20.3%をしめており、かなり多かった。また、教室の温度について、春秋については、普通であることを表す3にマークした学生が82.5%を占めていたが、夏に関しては、120名、33.5%の学生が暑すぎることを表す5の評価点にマークをしていた。やや暑いことを表す4にマークした学生も含めると全体の半分以上に当たる55.3%の学生が夏の教室に不快感を持っていたものと推察される。しかしながら、冬の気温については普通であったとした学生が62.5%を占めていた。

③出席状況についての自己評価

学生自身に自己の出席状態について評価させた。この質問は、一つには、学生に自己の出席状況について再認識させる目的で行ったが、この自己評価によ

る出席状況と実際の出席回数とを比較することによって、学生による評価の客観性と信頼性をみることも目的とした。

結果によれば、44.3%の学生が「ほとんど毎回出席した」と答えた。また、「半分くらい出席」が27.5%、「出席をとることを予告した日のみ」が19.5%、「ほとんど出なかった」8.2%、「その他」0.5%であった。この結果を後期試験を受けた学生の実際の出席率と比較してみた。実際に出席をとった10回のうち3回以下は15.7%、4～7回出席した学生は48.1%、8回以上出席した学生は全体の36.2%であった。この数字からみるかぎり、学生には自己の出席状況について実際よりも寛大な評価をする傾向があることがうかがえる。

しかしながら、アンケートではこの問の答は具体的な回数で示されておらず、「ほとんど毎回」、「半分くらい」が何回を意味するか明白にはされていない。また、出席をとった10回のうちの出席回数と実際の出席回数とが比例関係にあるかどうかについても検討の余地があり、設問の方法を改善して再度確かめてみる必要がある。

④受講の動機

文字どおり「人間の心理について学びたかった」が最も多く全解答の55.1%をしめ、ついで、「人文科学の単位が必要」が、21.5%であり、「動物の心理を学びたい」が7.5%、「たまたまこの時間があいていた」が6.5%、「友達と同じ授業に出たかった」が5.0%、「先輩にすすめられて」が2.5%、その他が1.9%であった。

⑤座った座席

1年を通じて座った座席については「いつもまんなか」と答えた学生が最も多く38.4%を占め、ついで「その日の気分によって」が22.1%、「いつも後ろの方」が20.1%、「いつも前の方」が最も少なく19.3%であった。

⑥その他の意見、提案

自由記述による意見、提案などを記入した学生は68名であった。その内容は

授業の内容についての希望、感想、反省、授業技術、試験、授業の行われる時間帯、出席のとりかた、感謝、特にない、など多岐にわたっていた。その例を以下に列挙した。

[内容]

人の心理についてもっと詳しくやってほしい。人間の精神面についての授業を。人間の普段の行動には出ない影のような心理についてやってほしい。心理テスト、心理学的実験をやってほしい。もっと身近な話題を。話題が多すぎる。

[授業全体]

おもしろい授業だった。授業がよかったのでわかりやすかった。心理学はおもしろい。心理学に興味をわいた。自分にプラスになる要因があった。キタイハズレ。つまらない。

[授業技術]

黒板を消すのがはやすぎる。黒板の字をもっときれいに正確に。授業(学生)がうるさいのをもっと叱って。

[試験]

持ち込み不可はつらい。試験が大変。精いっぱいやったつもりが、結果は先生の期待には応えられなかった。

[授業時間]

1時限なのはつらい。起きるのがつらい。

[授業規模]

人数が多すぎて先生も大変。できれば30~50人のクラスで授業して。

[出席]

とるなら毎回とって。遅刻を欠席扱いにしないで。

[感謝]

1年間ありがとうございました。うるさいものどもにつきあってくれてありがとう。

5 考 察

(1) 学生の学習状況についての評価

試験の得点は前期も後期もほぼ正規分布に近い形で分布していた。このことから、学生に対する評価は適切に行われたと考えられる。また、出席回数と評価点との間に相関が認められた点は、出席して講義を聴くことの重要であるという常識的な直観が、事実であることを示していると言えるだろう。さらに、予告せずに不意に出席をとったときの出席回数と後期の成績との間に有意な相関が認められたことは、自らの意志で自発的に授業に出席することが、授業内容の理解や知識の習得と関連があることを示していると言えよう。

(2) 学生による授業評価について

①学生による授業評価の信頼性

学生による授業評価の是非については、学生の評価に信頼性があるかどうかしばしば問題にされる。確かにアメリカでは学生による評価が広く行われているとしても、果たして日本の学生に公平で客観的な評価が可能であるのかという点が問題になる。東海大学の吉川ら(1991)は教室環境について同一学生に同一年度内に2回、質問用紙による調査を行い、その結果を比較検討した結果、学生らの解答が精度が高く、信頼性があることを証明している。調査対象とする学生数が少ない場合には、一部の学生によって偏った判断が行われた場合、それによって、結果が左右される危険性も考慮する必要もあるだろうが、300人以上を対象とした本研究には、その必要はないだろう。

確かに、出席に関する自己評価では、学生には自己の出席状況について、実際よりも寛大に評価する傾向が認められた。このことから、授業や教室環境についても、おそらくは、彼ら自身に有利な判断を行っている可能性が考えられる。しかしながら、実際に教室で授業を受ける当事者は学生であるのだから、彼らがどのように感じ、どのように判断しているのかを知ることは、教える側

に立つ者や、教室を管理する立場にある者にとって、重要であり、かつ、意義のあることであろう。

②解答内容について

授業についての評価項目中、平均値である3以下であったのは、プリント類の理解のみであったが、これは、教科書を補う意味で、やや程度の高い内容を呈示したことが、一つの要因である。また、本学の学生には、基本的な統計資料を読みとる訓練と指導が必要であることを示しているのかもしれない。

ほぼ、平均値近くにマークされた項目は、専門科目との関連、内容に対する期待、板書、話し方についての項目であった。専門科目との関連性をどの程度持たせるかについては、今後論議を要する点であろう。内容について期待はずれであったことを指摘した学生が若干あったが、これは、学生が最近のテレビ番組などにみられる「心理ゲーム」のイメージを「心理学」の授業に期待していた可能性もある。板書、話し方に関しては、担当者が鋭意努力して改善に励むべき課題であると考えられる。

教室環境についての項目では、授業を受ける人数が多すぎるという項目と夏の教室の温度が高すぎる点について指摘した学生が多くみられた。効率的に学習指導を行うためには、このような環境面での整備の必要性も見逃せまい。

③今後の課題

今回のアンケートには不備な点や不必要な点も多い。今後は質問項目について、さらに検討を加えるとともに、アンケートを行う時期や回数についても考慮する必要があるだろう。学生の学習状態に対する評価と同じく、年間に複数回行い、その信頼性を検討するとともに個人レベルで改善可能なことがらについてはすみやかに着手することが必要であるからである。

さらに、アンケート調査の結果を学生にも公表し、指摘されたことがらを現実的な改善に結び付けていくための具体的な試みが求められているのではないだろうか。

〔引用文献〕

- (1) 原 一雄 大学の自己点検・評価—その主体と対象— 一般教育学会誌 (13) 1, 27-31, 1991.
- (2) 江原武一 アメリカにおける大学評価 「大学評価の研究」
慶伊富長編 東京大学出版会 1984, pp. 15-20.
- (3) 喜多村和之 大学評価論 「高等教育の比較的考察」玉川大学出版部 1986,
pp. 82-93.
- (4) 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光沢舜明 学生による講義評価 一般教育学会誌 (8)1, 46-59, 昭和61年.
- (5) 吉川政夫ら 大学授業環境に関する研究 III—教室環境評定尺度の信頼性の検討— 東海大学紀要 教育研究所教育工学部門 (4)45-50, 1991.